

【図書紹介】 『サルトル 21世紀の思想家
—国際シンポジウム記録論集』 石崎晴己、
澤田直編 思潮社 二〇〇七年

古屋, 俊彦 / Furuya, Toshihiko

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

86

(終了ページ / End Page)

86

(発行年 / Year)

2008-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007922>

【図書紹介】

『サルトル 21世紀の思想家——国際シンポジウム記録論集』

石崎晴己 澤田直編 思潮社 二〇〇七年

古屋 俊彦

ジャン・ポール・サルトルの生誕百年に際して二〇〇五年に東京で行われた国際シンポジウムの記録論集である。この年には、ベルナール・アンリ・レヴィによる『サルトルの世紀』の邦訳が出版され、その内容をめぐる議論として「ヒューマニズムと反ヒューマニズム」が、この催しの柱となっている。法政哲学学会員である澤田直氏は、企画、シンポジウム、翻訳、研究発表などで中心的な役割を果たしている。この論集には行われた議論と発表が全て論考として収録されており、発表は、文学、美術、実践、各国サルトル受容の現状の順でまとめられている。生誕百年に際しては世界中で様々な催しがあつたようだが、サルトル研究が一時期の廃れから沸々とよみがえり新たに結果していく様子が、この論集からもうかがい知ることができ。サルトルによる政治的な問題への関与に対する様々な議論はレヴィの本によって再燃したのであるが、それ以上に、サルトルの芸術家としての実存を巡る一貫した問題がここでは主に考察され、これが新しい可能性の指摘としてまとまっている。澤田直氏の論考は「他者による自伝」と題され、書くことへと導かれる実存の無根拠性が自己を他者として作り上げる過程を、

自伝として書かれた『言葉』と、フローベールの評伝として書かれた『家の馬鹿息子』から並行して取り出して見せた。この書く事への投企の方向性は、サルトルが二一世紀の思想家でもあるというほのめかしの土台をなしていると言える。書く事に関しての他の論考は以下の通りである。サルトルによる文章の非線形化への情熱を指摘する、ジル・フィリップによる「文体への郷愁?」、サルトルが描く識字障害の特異性と、その取り上げ方の可能性を考察する、生方淳子による『家の馬鹿息子』と発達心理学、読者と作者との弁証法へのこだわりを、啓蒙の世紀、モンテーニュ、ペトラルカなどの現実的かつ虚構的な対話空間からの継承とみなし、そこに二重の不在の系譜をもみていく、フランソワ・ビゼによる「作者と読者の間」。その後に、サルトルの美術批評に関する論考が続く。この中では、サルトルのテイントレット論に関して、黒川学による「テイントレットの空間」が、鑑賞者への身体的働きかけという側面から文学論を補完する領域を示唆する。遠近表現の手がかりの不在は本物の不在なのかという問題を、フーコーのベラスケス論などと対比させてみることもできるだろう。